地域情報（県別）

【岩手】5月開業のクリニック、構想に菊池雄星選手も共感-和田知樹・いわてスポーツ・整形外科クリニック院長に聞く◆Vol.1

東京五輪選手村で整形外科医としても活動

m3.com地域版

順天堂大学医学部でスポーツ医学を学び、東京オリンピック・パラリンピックの選手村でも整形外科医として経験を積んだ和田知樹医師が2024年5月、地元の盛岡市で「いわてスポーツ・整形外科クリニック」を開院した。和田氏に、開院までの歩みやオリンピック・パラリンピックでの経験などについて聞いた。（2024年7月11日インタビュー、計2回連載の1回目）

▼第2回はこちら（近日公開）

和田知樹氏（本人提供）

――医師を目指したきっかけは何ですか。

祖父も父も兄も医師ですので、医師は身近な職業でした。小さい時には、「将来は医師になれ」と言われていました。こうして私も医師になりましたが、専門分野が違います。私は整形外科やスポーツ医学が専門ですが、祖父と父と兄は内科医です。

――なぜ整形外科やスポーツ医学を専門に選んだのでしょうか。

私自身、ずっと野球に打ち込んでいて、高校生の頃は朝5時くらいに起きて勉強し、それから朝練に行くという生活でした。高校時代には「スポーツと関わる仕事がしたいな」と思っており、医学の分野として整形外科やスポーツ医学も意識するようになりました。

――では、だいぶ早い段階で整形外科やスポーツ医学の道に進むと決めていたのですね。

そうですね。ただ、研修医時代や若い頃は、外科医としていろいろな病院に勤務していましたので、「手術をしたい」という気持ちも持っていました。また、ドクターヘリにも乗っていましたので、救急科にも憧れを抱いていました。けれども、私の根底には常にスポーツがありました。

――スポーツと言えば、和田先生は東京オリンピック・パラリンピック（2021年7～9月）での活動経験もお持ちですね。印象的なことはありましたか。

私は、選手村の整形外科医として、開会前の準備段階から大会に関わりました。オリンピック・パラリンピックは、いろいろなことを考えさせてくれる場所でした。当時は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が猛威を振るっていました。大会が延期になったことは、皆さんも記憶していらっしゃると思います。あの頃は、大会のユニフォームを着て街を移動していると、白い眼で見られたものです。「今はオリンピックどころじゃないだろ」「お前たちは何をやっているんだ」というのが当時の雰囲気で、実際に否定的な言葉を投げかけられたこともあります。それでも、世界中の選手たちは、オリンピックとパラリンピックを目指して練習に励んでいるわけですから、「世界の選手たちのためにも、大会を作り上げよう」と私たちは強く思っていました。

そして開会式の日、ドラゴンクエストのファンファーレ（ロトのテーマ）が鳴り響いた時は、こみ上げてくるものがあり、本当に感動しました。競技が始まり、柔道男子60キロ級の高藤直寿選手が日本勢で第1号となる金メダルを獲得するなど、大会が盛り上がってくると、街の雰囲気も変わりました。白眼視されることはなくなり、逆に「がんばって」などと声をかけていただけるようになりました。この時は「スポーツは世界を変えられるんだな」と強く実感しました。

選手村では有名な選手にも会いましたし、たくさんの国の選手やスタッフと関わりました。初めて聞く国名もありました。選手村で関わった国の数は100カ国以上です。いろいろな国の医師とも話しましたが、私たち医師がやっていることは、選手や患者に医療を提供することです。国が違ってもやっていることは同じだなと感じました。そして、治療が終わると「Enjoy Olympic」と言ってお互いに別れます。選手村には、大会を楽しみ、大会を盛り上げようという雰囲気がありましたね。

ただ、オリンピック期間中にアフガニスタンの内戦が始まり、私たちが治療していた選手がどうなったか心配でした。

――パラリンピックやパラスポーツにはどのように関わっているのですか。

私は、日本パラスポーツ協会のパラスポーツ医でもあり、パラスポーツには前々から関わっています。車いすテニスのチームには、医師として参加しています。具体的には、パラスポーツの選手たちに対し、メディカルアドバイザーとして治療の相談に乗ったり、メディカルチェックをしたり、現場でけがなどの対応をしたりしています。

一般的に、多くの方々は障害者に対して「かわいそうだ」という感情を抱いていると思います。しかし、パラスポーツの選手たちは、決して弱い存在ではなく、ものすごい力を持った人たちです。たまたま身体のどこかが悪いというだけで、本当に素晴らしい身体能力を持っています。私も車いすテニスをやってみたことがありますが、とてもではありませんが、選手と同じようにはできません。選手たちの身体能力には驚かされます。私は、パラスポーツの選手たちをリスペクトしています。

――車いすテニスでは、いわてスポーツ・整形外科クリニックは坂口竜太郎選手とスポンサー契約をしていますね。坂口選手との交流はいつからですか。

スポンサー契約をしたのは、いわてスポーツ・整形外科クリニックを開院してからですが、坂口選手とは彼のジュニア時代からの付き合いです。坂口選手は今、アメリカのサンディエゴ州立大学の学生になっていますが、さらなる飛躍を期待しています。

――いわてスポーツ・整形外科クリニックの開院の経緯を教えてください。

独立開業は、ずっと前から目標にしていたわけではなく、いろいろな方との意見交換を通し、徐々に意識するようになりました。例えば、メジャーリーグベースボールの菊池雄星選手です。菊池選手とは地元が同じで、ともに盛岡市の出身です。その縁もあり、菊池選手主催の野球肘検診に、医師として参加したことがあります。その時、菊池選手と現場の状況の話題になり、「岩手でスポーツ選手を診られるクリニックがつくれるといいですね」と私から話をしたら、菊池選手も共感してくれました。

私自身、高校時代には膝を痛め、自由に練習できない時期がありました。練習できないと焦りますが、当時はどうしたら良いかも分かりませんでした。あの時、私を診てくださった先生は、とても良くしてくださいましたが、スポーツ診療の専門クリニックがあれば、もっと他のことができたかもしれません。

また、2020年に父が他界し、地元を意識し始めたことも開院のきっかけです。それまでは、静岡、千葉、東京で勤務していましたが、「岩手で医療をしたい」と考えるようになりました。父が盛岡市医師会の会長を務めていたこともあり、私も「死ぬまでに何かしなくては」「自分でやらなくては」という気持ちは持っていました。そして、地元で医療を行うのであれば、スポーツ選手を専門的に診られるクリニックだと思っていました。

さらに言えば、出身地の盛岡での開院だから独立を決意できました。今、家族は千葉で暮らしており、私は盛岡に単身赴任しています。もちろん家族と一緒にいたい気持ちはあります。単身赴任してでも取り組めるのは、盛岡だからです。私のこれまでの経験を、盛岡や岩手に還元していきたいと願い、開院に踏み切りました。

◆和田 知樹（わだ・ともき）氏

2009年、順天堂大学医学部を卒業。順天堂静岡病院整形外科、伊豆保健医療センター、順天堂浦安病院、江東病院、東京オリンピック選手村ポリクリニック整形外科、なかざわスポーツクリニックを経て、2024年5月、いわてスポーツ・整形外科クリニックを開院。医学博士、日本専門医機構整形外科専門医、日本整形外科学会運動器リハビリテーション医・リウマチ医、日本スポーツ協会スポーツドクター、日本パラスポーツ協会パラスポーツ医。

【取材・文＝武井克真】

記事検索

ニュース・医療維新を検索